

刊 行 の 辞

昭和17年3月23日（勅令第182條）、東亞風土病研究所が長崎醫科大學に附屬して設置され、東亞地區の風土病に關する研究を目標として活動が續けられたが、學術上、◀東亞◯なる地理的並びに民族的な觀念を以つて限界づけられる必要はないので、昭和21年4月1日（勅令第206號）、風土病研究所と改稱された。爾後間もなく、新學制機構に伴なつて、昭和24年5月31日（法律第150號）、長崎大學に附置され、今日に到つてゐる。創立以來、初度調辦費も建築費も交付されないで、専用の施設を有せず、長崎醫科大學の諸教室（病理學・細菌學・內科學・皮膚科學）に分散して研究作業に従事したが、過半数の研究員は戦争に徴集され、残留研究員は、昭和20年8月9日、原子爆弾によつて全滅に瀕した。また、當時、民間に寄附を募り、長崎醫科大學構内の一角に地を卜し、400坪の建造に着工しつつあつたが、*fata obstant*, 同日、物質的材料と精神的希望の一切は灰燼に歸するの運命に遭遇した。

勿論、大學の使命を考へれば、教育と研究とに輕重の差のある筈はないが、戦災復舊の方針において、時間的制約の下にある多數の學生を擁する教育施設の優先的處置を妥當でないとは言へない。それゆゑ、風土病研究所の復興工事の計畫が遷延せざるを得なくなつたのも自然の成行ではあるが、現在、長崎大學醫學部附屬病院諫早分院の一隅の假小屋に蟄居し、不備不便を忍び、研究作業に従事しつつある實態は、哀憐悲憤の涙を禁じ難いものがある。終戦後、政府から支給された經費は、大部分、器具・機械の購入に當てざるを得なかつたが、それでも充分な施設が整つたわけではない。この間、研究員諸君が學問精進の熾烈な欲求と責任遂行の強固な意志とを以つて豫想以上の成果を挙げたことに對しては、尊敬と感謝が捧げられねばならないのであつて、其處に同情のない酷薄な冷評の下されることを私は拒むものである。

斯くて、風土病研究は、創立以來、物的には恵まれず、人的にも災害を蒙り、◀茨の道◯を歩んで來たが、とまれ、終戦後の時日の経過とともに漸次に發展の一途を辿りつつある事實は認められねばならない。現在、專屬教官の定員は、教授2、助教授2、助手10を算し、昭和26年度には莫大な豫算を支給されたので、内容的には稍々活況を呈するに至り、下記構成によつて研究作業を運営してゐる。

I. 病 理 部：

第一研究室：病原微生物學〔登倉教授〕

第二研究室：免疫血清學〔高橋助教授〕

II. 臨 床 部：

第一研究室：内科領域臨床醫學〔後藤講師〕

第二研究室：外科領域臨床醫學〔片峯助教授〕

III. 疫 理 部：

第一研究室：衛生動物學〔大森教授〕

第二研究室：風土環境學〔未設置〕

また、今度、長崎醫科大學に請ひ、横田教授（内科）、北村教授（皮膚科）、松岡教授（病理學）、中澤教授（藥理學）の兼職を得、研究遂行上の協力及び指導を受けることになつたので、一段と成果の擧がることを信じて疑はない。素より、風土病研究の對象は、長崎地方又は九州一圓のそれに止どまらず、日本全國又は世界各地に求めねばならないのであつて、將來、豫算の擴充により、この理念の實現に到達することを期待する。但、目下切實に念願されることは、

日本政府及び長崎大學の計畫に於いて、◦科學の殿堂◦として相應しい、耐火・耐震の大建築の成ることに他ならない。

今般、來る3月23日を以つて、風土病研究所は創立以來10周年の歳月を閲することになるので、終戦後の再出發によつて追加された業績を集成し（全部ではないが）、長崎醫學會雜誌の一冊を借りて記念號となし、祝賀の歡びを表はすとともに、研究員諸君が不備不足の條件に於いて不退轉の努力を以つて擧げられた研究成果を敢へて世に問ふことにしたが、それによつて風土病並びに流行病の知見に若干の寄與するところあらば幸甚とするものである。通算平均して、1年13篇づつの業績を擧げてゐるので、量に於いても決して少いとは思はない。長崎醫學會雜誌編輯幹事 林一郎教授が我等のために貴重の一冊を割愛して業績發表の好機會を與へられたこと、前所員青木義勇教授が業績目錄編纂の勞を吝まれられなかつたことに對して、此處に深甚の謝意を表する次第である。

昭和27年2月11日

長崎大學長崎医科大学教授

長崎大學風土病研究所長

登 倉 登